

支え合う社会を

村上市立朝日中学校 3年 板垣 南 実

私はそのニュースを見たとき、日本人であることを誇らしく思いました。

今年の6月から7月にかけて、ブラジルでサッカーのワールドカップが開催されました。そのニュースの中の一つに私の目は釘付けになったのです。それは、日本人のサポーターが、試合の後、大きなビニール袋を持って会場のゴミ拾いをする写真がツイッターに投稿され、世界から賞賛を浴びているというものでした。

「日本は最高！」

「彼らの文化と教育にブラボー」

「尊敬すべき行動だ。私たちも学ばないといけない」

などと、世界各地の人々がさまざまな言語で報じていました。

以前から、日本では、スポーツイベント後に、ゴミを拾うという行動がありました。また、子どもの頃から、自分で出したゴミは持ち帰る、とも言われてきました。日本人として当たり前だと思っていることが、世界から尊敬され、信頼されたことは、とてもうれしかったです。

今、「ボランティア活動」ということが注目されています。日本では「奉仕活動」の意味として使われる場合が多いです。他人のために何かをしてあげる、まさにそういう発想だと思います。

私も、小学生のときに、何度か体験したことがあります。小学校の近くにある道の駅で雪かきをしたり、障害を持った人たちが働いている施設や老人ホームを訪問し、一緒に作業したりしました。どれも慣れない仕事ばかりで、とても疲れました。しかし、周りの皆さんに喜んでもらい、「ありがとう」の言葉を聞いたときは、「やってよかったなあ」と何とも言えない満足感を感じました。

2011年、3月に起きた東日本大震災。当時の小学校の先生が、実際に被災地に行き、ボランティア活動を行いました。先生からその話を聞いたとき、被害の大きさや悲惨な様子が印象に残りましたが、「ボランティア活動」を強く意識するきっかけとなりました。

中学生になり、「ボランティア活動」を行う機会は減りました。しかし、ある出来事で再び意識するようになりました。

私は、陸上競技部に所属しています。陸上競技では何度か記録会と呼ばれる大会があります。ある記録会の日、私は、けがのため出場できず、みんなのサポートに回りました。

全ての日程が終了し、私と他の部員と顧問の先生の3人で、競技場のゴミ拾いをしました。それまで度々利用している場所でしたが、ゴミが落ちていることに、改めて驚きました。最初は面倒くさくて嫌々やっていました。そのうちに、毎回利用させてもらっている場所をきれいにすることができて良かったと思うようになりました。

このとき、私は気づいたのです。陸上競技の一つの大会であっても、たくさんの人たちが関わっている、多くの人たちに支えられて行われているということ。他の競技会でもゴミが落ちていることを見たことはありません。きっと大会の後に、ゴミを拾ってくれている人がいるのです。また、暑さの中、役員をしてくださっている人もいます。大会の度

に、朝早く起きて弁当を作ってくれる母親。遠い会場まで私たちを送迎してくれる運転手の方々。そういう人たちがいなければ、私たちは大会に出場することができないのです。多くの人たちに支えられていることを忘れてはいけない、と強く思います。

「自分のことは自分でやって当たり前だ」確かにそういう考え方があります。しかし、今の社会では、人は一人では生きてはいけません。だからこそ、支え合うことは重要なのではないのでしょうか。私は弱い人間です。困っているときは助けてもらいたいです。だから、困っている人がいたら助けてあげたいと思います。みんなが支え合う社会になれば良いと思います。そんな社会を作っていきたいと思います。

私は、そんな大きなことはできないけれども、身近にある自分にできることをやっていたらいいなあと思います。